

2002年ソルトレイク冬季五輪開会式の文化プログラム “Light the Fire Within”の解釈

東京都立大学 舛本直文

はじめに

2002年ソルトレイク冬季五輪開会式では、ブッシュ大統領の開会宣言の五輪憲章プロトコル違反、および全米同時多発テロの被災地である国際貿易センタービル跡地から掘り出された反テロリズムの象徴的な米国旗（WTC flag）の入場、という2つの大きな問題が、オリンピックという平和思想に大きな影を落とした。聖火の最終点火には1980年レイクプラシッド大会の米国アイスホッケー優勝チーム‘Miracle on Ice’が選ばれ、一大「USAコール」がわき起こった。このように、ソルトレイク冬期五輪のすべてが米国のナショナリズムとペイトリオティズムに彩られた大会となったことは記憶に新しい。

このような平和の祭典で政治問題が色濃く反映されることは何も珍しいことではない。しかし、そのような開会式で大がかりに展開される文化プログラムという一大ショーは、このような政治利用とどのような関係にあるのであろうか？ それに関して考察することが本研究報告の主たる動機である。このようなプログラムはオリンピックの普遍主義対開催国の愛国主義という軋轢にもまれ、テレビの視聴率競争の波にも押し流され、どんどん変容してきている。しかしながら、これまであまり研究されてこなかった問題でもある。

先行の関連研究を概観すると、1988年のソウル大会の開会式の一部が韓国と米国のテレビ放映でどのようなコメントともに伝えられたかというMcAloonらの比較研究が最初のものである¹⁾。このような研究を受けて1992年バルセロナ五輪大会以後、McAloonとMoragasらは文化プログラムに関する研究プロジェクトを起こし、その報告書が刊行されているのがこれまでの主な研究成果であるといえよう²⁾。その後、この種の研究はあま

り盛んに行われてはいないが、1994年リレハンメル冬季大会³⁾ および2000年シドニー大会⁴⁾でも小規模ながら進められてきた。しかしながら、この種の研究は文化プログラムそのものに深く考究したものではなく、テレビメディアとの関連やナショナリスティックな文化発信の分析に偏向している嫌いがあった。そこで、シドニーの開会式の文化プログラムに焦点化した分析⁵⁾ およびこれまでの五輪大会の文化プログラムの歴史を概観する必要性からレビューした研究を行ってきた⁶⁾。

本研究はこのような研究成果をふまえ、さらに文化プログラムにおける様々な対立構造とそのヘゲモニー闘争のコンフリクトに着目しながら、文化プログラムのさらに深い解釈を行っていくというものである。本研究では、特にソルトレイク大会の文化プログラム“Light the Fire Within”を分析の対象としている。本研究の目的と方法は以下の通りである。

この文化プログラムは「一体どのようなメッセージを伝えるショーなのか？」「光の子Child of Lightは何を象徴するか？」「内なる炎Fire withinは何を象徴するか？」「炎の位置づけはどうなっているか？」このような問題に対して、プロデューサーたちの意図も確認するとともに、コンテキストに応じメタ・テキストに配慮しながら解釈を進めていく。まずは文化プログラムの大まかな流れを開会式のショープログラムを元に整理しながら、制作者達の意図とコンテキストを確認して議論を進めていくことにする。

1. 文化プログラムの内容

1.1. The Fire Within (内なる炎)

プログラムメッセージ “The sole purpose of human existence is to KINDLE A LIGHT in the darkness of mere being — Carl Jung” 「私たち全員の

奥深くに、これまで可能であると思っていた以上の高みまで登る力がある。おそらくこの世で利用されていない最大の資源はこの内なる炎であろう。この炎を共有することによってのみ、私たちは人間の精神の本質を悟ることができる」⁷⁾。

オープニング：The Fire Within (内なる炎) の解説は次のようになっている。「ある寒い凍てつく夕方、吹き荒れる嵐が大地を呼び覚ました。嵐は普遍的なものであり、私たちが人生において出会う苦難と挑戦を表している。ランプを持った光の子は人間精神の強さと逆境との闘いを擬人化して示している。この子は嵐に打たれ疲れ果てるが、オリンピック選手の決意と不屈の精神によって、内なる耐える力を見つける。この内なる炎という力は、この子にとってほんのりと燃えているような姿に見え、光の子と一緒に燃える。勝利がもたらされる。この子は他者と炎を分け合い、この子たちがスタジアムを希望と友情のかがり火に変えていく。この先2週間半、この光の子たちが私たちを五輪大会に案内し、内なる炎の世界を思い出させてくれる」⁸⁾。ここに「内なる炎」と「光の子」の関係がよく示されている。これに続く“The Fire Within Show”に向けて、「光の子」から火を分けられた子どもたちは選手入場の先導役となる。

1.2. Parade of Athletes (選手入場)

「光の子」たちは選手入場の際に選手達の足下を照らす先導役を果たした。「子どもたちが足下を照らし、選手たちがスタジアムに入場行進を始める。古代オリンピア祭の誕生の地を讃え、ギリシャが先頭で行進し、80カ国以上の国々の選手団がそれに続く。選手たちは平等に行進し、国旗を掲げ国のプライドを背負っている。この選手たちは冬季スポーツで偉大な成果をなした。ここまでくる旅は、大きな犠牲と非常な努力、さらに信じられない勝利で特徴づけられる。私たちはまもなく努力が報われる瞬間になじみになるヒーローたちを讃える。毎日会場で、毎夜メダルプラザで応援する」⁹⁾。

1.3. Native American Welcome (先住民の歓迎)

プログラムはアメリカ西部のローカリズムのシ

ョーへと続く。まずは先住民の歓迎セレモニーである。「地上のすべてのものに目的があり、誰もが使命を持っている (アメリカ先住民の諺)」¹⁰⁾ というプログラムのメッセージから、ソルトレイク大会の使命は? 文化プログラムの使命は? また、この先住民の歓迎ショーの目的は? などの様々な問が派生する。

「何世紀にもわたって、アメリカ先住民の文化は、母なる大地、人間の運動、永遠のシンボルを尊敬してきた。ちょうどユタ州の先住民の5部族が共に集って祝うように、世界中の文化と国民が2002年ソルトレイク冬季五輪に集っている」 「ユタ5部族の今夜の集会—ゴシュート、ナバホ、パイユート、ショシューン、ユーツ—は歴史上素晴らしい瞬間をもたらす。これは今までで初めてのことである。5部族はそれぞれ自分たちの伝統、文化、信念を持った集団であるが、それが一堂に会する。五輪精神に則り、彼らは太鼓のリズムに共通のものを見いだした。彼らはソルトレイクとアメリカが世界を公式に歓迎するために集まった。」 「5部族の人々が自分たちの土地に冬季五輪がやってきたことを祝福する際に、強烈なシンボルを客人と分かち合う。アメリカ先住民にとって、高く舞い上がる鷲は神聖なるものを表し、サークルと呪術師の車は精神と自然および人間の世界を壊れない鎖で結びつける。ドラムビートは母なる大地の鼓動を表している。これらのシンボルの強さと意味は強烈な色、動き、音楽のパフォーマンスによって表現される」¹¹⁾ というプログラムの解説がこの後のパフォーマンスをうまく説明している。色彩豊かで、ドラムのリズムと老若男女が舞台狭しと踊りまくる。フープダンスも見える。

1.4. American West Suite (アメリカ西部一式)

続いて白人移民たちの歴史プログラムである。「西部の魅力—ドラマチックな風景と新しい生活への約束—開拓者たちを叙事詩的な旅に誘い込んだ。再び世界の人々がアメリカの山々に囲まれた西部の中心地にやってきて、ソルトレイク2002年大会で、平和、調和、人間の可能性を分かち合う」¹²⁾ という解説が、西部の魅力と開拓民たちの自由、それとソルトレイク冬季五輪の歓迎ぶりを

象徴する。しかしながら、ここには先住民との対立や和解のショーは見られない。これがアメリカ西部の現状を映し出している。

1.5. Call of the Champions (勝利者を呼ぼう)

「人生で重要なことは、勝つことではなく参加することである。大切なことは、征服することではなくよく戦ったことである（ピエール・ド・クーベルタン）」「有史以来、人間の言葉は我々を鼓舞し啓発してきた。今夜、人間の言葉と人間の精神は2002年ソルトレイク大会に対するミュージカルの贈り物として結実する。それは五輪旗の掲揚と第19回冬季大会の正式な開会において輝かしい序章となる」¹³⁾。ここでは、クーベルタンの格言を引用し、開会宣言等のスピーチをこのパートに持ってきて、それが正式な儀式的開始を告げる、という構成になっている。

先ず、2002年ソルトレイク大会の公式ミュージック“Call of the Champions”が世界にお目見えし、2002年ソルトレイク組織委員会委員長であるMitt RomneyとIOC会長Dr. Jacques Roggeの開会の挨拶、そしてアメリカ合衆国大統領George W. Bushの開会宣言が続く。続いて、五輪旗の入場である。8人の旗手たちは以下のように説明されている。「Symbols of peace (平和の象徴)我々は大いなる期待を込めて、調和と統一的世界的で普遍的な象徴である五輪旗がスタジアムに入場するのを見守る。8人の旗手たちは、五輪旗に象徴される5大陸、オリンピック運動の3本柱であるスポーツ、文化、環境を表している。政治家、平和活動家、予言者、国民的英雄たちが世界を鼓舞してきた」¹⁴⁾と。ここで五輪旗入場とオリンピック賛歌演奏が行われた。

次のパートが放鳩である。最近では模型や風船が使われる。「歴史の中でこれまでずっと、鳩は楽観と平和の象徴であった。その象徴的な鳩は五輪の長い伝統の中で放鳩されてきた。それは大変壊れやすい(フラジャイル)時代にあって、我々に希望という力を思い出させてくれる」¹⁵⁾。演奏はStingとYo-Yo Maである。これは、2001年のようにテロで壊れやすい世界を念頭に歌い、世界平和を希求する演出である。

1.6. Olympic Dream (オリンピックの夢)

「もし夢を実現しようというパワーを与えられなければ、望みも決して与えられないだろう」¹⁶⁾というプログラムのリチャード・バックの言葉がオリンピックにかける若者たちの夢を肯定する。「オリンピックで戦うことはアスリートの最大の望みである。スピードと優雅さで限界を超え、表彰台でメダルを受賞し、勝利の国歌の演奏を聴く。これらの栄光は子どもたちの夢を育む—それは未来のオリンピック」。「オリンピック選手は誰でも、その国籍を問わず、同じ道をたどる。子ども時代は、そのスポーツが本当に好きで遊んだ。オリンピックへの夢を実現するにつれ—それがスキーの素晴らしい滑降であれ、氷上の華麗なスピンドルであれ—アスリートたちは達成しなくてはならない『内なる炎』を見つけだしてきた。今宵、このスタジアムでは彼らは世界とその夢を分かち合い、世界をインスパイアする力を共有する」¹⁷⁾。ここは、少女から五輪スケーター(クリスティー・ヤマガチ)に成長するまでの物語が演じられる。五輪の夢の再生産が肯定されるパートである。

1.7. Finale: Light the Fire Within (フィナーレ：「内なる炎」を燃やせ)

「最も大きな成功はただ単に内なる炎が反映したものである(ケネス・ヒルデブランド)」。「ギリシャのオリンピアから叙事詩的な旅が始まり、米國中を旅しオリンピック聖火がスタジアムに登場する。過去65日間にわたって11,500人の聖火ランナーが46州を旅してきた。これらの希望と統合のメッセンジャーはオリンピック運動の理想とソルトレイク2000年大会の『内なる炎を燃やせ』というテーマを国内に広めてきた。一步ごとにインスパイアする炎の力は大きくなっていった。オリンピックの聖火台に点火されたときに、その炎が内から輝き、ソルトレイクの山野、ワサッチ山脈、そして世界中を照らすのを見る。オリンピックの聖火が暗闇を照らせば、さようならを告げよう。しかしそれは今夜だけのこと。明日からまた、次の2002年ソルトレイク大会物語の新しい一章が始まる。「内なる炎を燃やせ」¹⁸⁾

このパートでは聖火の最終点火に向けてアイス

ショーが展開される。主な演出は氷とパフォーマンスと花火である。

1.8. 聖火台への点火

アメリカの冬季五輪のオリンピックたちの手によって聖火が会場内でリレーされる。最終点火者は1980年レイクプラシッド大会の米国アイスホッケーチーム“Miracle on Ice”の面々である。すぐに会場から自然発生的に“USA! USA!”の大合唱がわき起こる。従来の個人による点火からチームによる点火に変更されているが、これは愛国心喚起の仕掛けなのかと思われるほどの趣向である。“Light the Fire Within”がLeann Rimesによって歌われ、“Ode to Joy”がKeith Lockhartの演奏とモルモン・タバナクル合唱団によって歌われる。

このフィナーレでは花火が多用され、炎との関係が演出される。炎は、聖火の採火から聖火リレーを経て、開会式の文化プログラムショーによって、「内なる炎」「光の子」「選手団先導の炎」「Light the Fire Withinショー」「聖火台点火」「花火で終演」という連携をもっているのである。

2. コンテクスト

2.1. 平和主義

五輪旗の入場は5大陸の代表であるJohn Glenn (USA, アメリカ), Lech Walesa (Poland, ヨーロッパ), Desmond Tutu (South Africa, アフリカ), Kazuyoshi Funaki (Japan, アジア), Cathy Freeman (Australia, オセアニア) とオリンピックの3本柱であるJean-Claude Killy (France, スポーツ), Steven Spielberg (USA, 文化) and Jean-Michel Cousteau (France, 環境) の8人によって運び込まれた。この大会が世界平和と民族や文化の多様性の大会を希求しているというメッセージが、この人選から窺える。反テロリズムやナショナリズム中心のメッセージを発信するのであれば、自国の旗手たちを選んだに違いない。しかしそれは見せかけだけなのかも知れない。

2.2. ペイトリオティック・ゲーム (愛国心大会)

これは、WTC flagの入場に代表されるアメリ

カの愛国主義の氾濫である。これはIOCと大論争になった問題であるが、アメリカのナショナリズムやひいては戦争当事国としての反テロ戦争の正当化とジンゴイスティックな大会へとつながるコンテクストとなる。2001年9月11日の犠牲者に対する「ヒーリング・ゲーム」¹⁹⁾という言い方もされたが、ここにはアメリカ以外の被害者への視線が窺えない。まさに、これは世界の平和の祭典ではなくアメリカの大会であり、アメリカだけからの平和の発信という姿勢につながる。この意味では、開会式の文化プログラムは、普遍的な夢としての「内なる炎」を象徴してはいない。‘Miracle on Ice’のチーム点火、WTC flagの入場に代表されるように、アメリカ人のためのアメリカ人によるアメリカのための大会になってしまう。

2.3. 制作者たちの意図

開会式の総合プロデューサーであるDon Mischerを始めとする制作者たちの意向を確認しておくこともコンテクストとして重要である。Don Mischerはエミー賞を13回受賞している著名な芸術演出家である。1996年のAtlanta Gamesの開・閉会式も担当している。

彼らの姿勢には“*For the brief moment in time, the Olympics bring the world together and give us an extraordinary opportunity to celebrate the best of the human experience... freedom, equality, fair competition, passion, perseverance and excellence. The opportunity to contribute to the celebration of the Olympic Movement and the athletes of the world has attracted and inspired a talented production team credited for producing tonight's event.*”²⁰⁾とあるように世界平和が視野に入っている。

2月5日のリハーサル後のインタビューでも、「米国中心にならないように、これは全世界のイベントだ!」と語っている。また、9月11日のテロ以後にもセレモニーは変更しない、という姿勢を貫いたが、最終的にWTC flag問題が制作者たちの意向をも無視して進行したことが分かる。また、スタッフたちの中には「大会を通じてテーマである子どもたちに世界を紹介する (Scott Givens談)」という意見もあるが、一体どのよう

な世界がそこには想定されたのであろうか？ アメリカ中心の世界、あるいは五輪の世界なのか？

3. メディアの論調

米国紙は、2月9日、10日のニューヨーク・タイムス²¹⁾を除き、開会式の愛国主義やショーに対しておしなべて好意的である。さらに、WTC flagの入場が五輪憲章のプロトコル違反であり、五輪の政治利用となるとIOCが強行に反対したことに対して、一斉に批判しているほどである。

このような米国誌に対し、APは外国メディアは開会式の愛国主義的色彩に批判的と報じた²²⁾。特に、クウェート、ロシア、スウェーデン、フランス、日本の批判的論調を紹介し、アメリカの独走と反テロ戦争容認のジンゴイズムやショービジネスに危機感を抱いている世界の様子を紹介した。

日本の論調は、賛否両論であるのが実情であろう。谷口源太郎や辺見庸は強い警鐘を鳴らしている（辺見のコメント²³⁾を参照）。一方で浅井慎平は素直な演出と困難に立ち向かう少年の姿が、普遍的テーマを描いていたと賞賛している²⁴⁾。

このように立場によって評価が大きく分かれているのがメディアの論調であったが、概して米国メディアは好意的に、外国メディアが懸念を表明し、報道が対立的図式になったといえる。

4. 論議

先ず第1にローカリズム。ソルトレイク冬季五輪の開会式の流れを追う限り、アメリカ開催都市の歴史と文化の紹介、つまりユタ州とアメリカ西部のローカリズムに基づいたメッセージが発信された結論づけることができる。それは一体誰のために発信されたのであろうか？ ユタ州民、アメリカ国民、アスリートたち、観客や関係者、世界の人々？ 様々な次元が考えられるが、主たる発信対象はアメリカ国民に向けたものであったはずである。厳しいセキュリティ体制下、アメリカの威信をかけて開催した大会の正当性とアメリカの国力は、先ず全米に示すことによってアメリカの、ブッシュの政策の正当性を示す必要があった。

その意味でWTC flagを入場させなければならなかった。文化プログラムでも、勢いアメリカのローカリズムをドミナントにし、かつアトランタと違った地方色（西部色）を出す必要性もあった。

第2にはグローバリズム。五輪大会とは、世界の若者を一堂に集め、スポーツを通して心身共に調和のとれた人間に教育し、世界に平和に貢献するような人間を育てようというオリンピズムという教育思想、平和思想に基づいたスポーツの一大祭典である。その意味で五輪開会式の発信するメッセージはグローバリズムの視点が必要である。WTC flagの入場やMiracle on Iceの最終点火のような仕掛けは、米国中心の米国の癒しのゲーム、愛国主義のゲームであり、そのような姿勢ではグローバリズムの視点は達成されない。文化プログラムではアメリカ先住民の歓迎ショーと西部開拓史と大自然賛歌がメインであったが、これもローカリズム賛歌に他ならない。

第3に若者たちの夢の再生産という普遍的テーマである。少女が五輪を夢みてオリンピックに成長していくというパートは、アメリカの夢の再生産、つまり、熱望し一生懸命努力すれば夢は叶えられるというアメリカンドリームを肯定する趣向である。これもアメリカ主義の再生産である。子どもは誰でも夢を見、それが叶えられるという物語は、子どもの夢の形通りの普遍主義（ユニバーサリズム）ではある。しかしそのような夢さえも見られないという現実が一方で待っている。反テロ戦争を展開しているアフガニスタンでもそうである。ここには、見せかけのグローバリズムとともに見せかけの子どもたちの夢の実現という幻想の物語が展開されているとも考えられる。

ただし、この点に関して、開会式のテーマ“Light the Fire Within”について解釈を深めなくてはならない。「光の子」が人間の苦難と克服への試練の道を示し、それが文化プログラムの先導をしていくという構成、およびその「光の子」が苦難に遭遇したときに「内なる炎」を燃やし続けることで夢を叶えていくという物語展開は、アメリカ主義であろうか？ フィギュアスケートが大人気のアメリカでアイスショーとして実演することはそれなりの意味はある。「光の子」が先導す

るプログラムは人間が関与するパートに関わっている。一方で開会宣言や選手宣誓、審判の宣誓、あるいは聖火の点火には「光の子」は先導しない。神への誓いや祈りには人間的な関与は不可能であるということなのかも知れない。この意味で「光の子」と「内なる炎」が関与するパートは、アメリカ主義というよりは神聖なる祭典という西洋的な信仰が反映されていると見なすこともできるかもしれない。

第4は愛国主義 (ペイトリオティズム)。WTC flag を公式国旗として入場行進に利用したり、国歌斉唱時に掲揚するという発想は、いかにもアメリカの愛国主義教育と結びついている。先住民のパフォーマンスと西部開拓民の歴史と文化、西部の大自然賛歌のパートは、ユタの文化を全米に知らしめる文化のショーケースとしての性格を示している。ここには、自国文化と歴史を知ろうというペイトリオティックな教育との関連性が見て取れる。世界的な平和の祭典、若者の教育という普遍的な文化としての五輪のトランスナショナルな側面は無視されてしまっている。この意味で、五輪開催都市を中心に展開されるオリンピック教育も勢い愛国主義としてのオリンピック教育になりがちである²⁹⁾。

以上のようにみると、ソルトレイクの開会式にはアメリカ政府とSLOCの両者に、ダブルスタンダードが存在していたという結論に帰結するように思われる。それは文化プログラムの構成にも演出にも公式行事の変更にも介在していたといえよう。2000年シドニー大会のプログラムに見られたような先住民との和解のプログラムは、残念ながら演じられなかった。ここに、未だに米国の病む部分がかいま見られたともいえよう。

注および引用・参考文献

- 1) Landry, F., Landry, M., and Yerles, M. (Eds.) (1991). Sport... Third millennium. Proceedings of the International Symposium, Quebec City, Canada, May 21-25, 1990. Les Presses de L'Universite Lavel, pp.45-97.
- 2) Moragas, M. et al (Eds.) (1996). Olympic ceremonies: Historical continuity and cultural exchange. International Olympic Committee, Pp. 379.
- 3) Puijk, Roel (1999). Producing Norwegian culture for domestic and foreign gazes: The Lillehammer Olympic opening ceremony. In Klausen, Arne M. (ed.) Olympic Games as performance and public event: The case of the XVII Winter Olympic Games in Norway. Berghahn Books, pp.97-136.
- 4) Garcia, B, and Miah, A. (2000). Olympic ideal and Disney dreams: Opportunities and constraints for cultural representation during Sydney's opening ceremony. Human Kinetics Social Sciences and Sport. <http://www.humankinetics.com/products/hperd/news.cfm?sui c=Osss&id=2933>.
- 5) 舛本直文. (2001). シドニーオリンピック開会式のテレビ放映：文化プログラムの解釈を中心に. 季刊 iichiko No.89: 90-103.
- 6) 舛本直文. (2002). 近代オリンピック開会式にみる文化プログラム：その歴史的展開と目的性. 体育原理研究 32:1-9.
- 7) SLOOC. (2002). 2002 Salt Lake Games Opening Ceremony Program より
- 8-18) 同上
- 19) Alexander, R. N. (2002). 'Miracle Men' Get Fired Up. The Washington Post, 2002. Feb. 9.
- 20) 前出2002SLOOCプログラム。
- 21) Vecsey, GeorgeとWang, Edwardの署名記事参照。New York Times, 2002.2.9.
- 22) Aran, Jaimの署名記事参照。AP, 2002. 2.9.
- 23) 共同通信社 2002年2月9日 13:18. 米国主義に強い違和感—貧困と闇への想像力欠く：作家辺見庸さんの話「…人類社会は多くの試練の後に、結局、幸福の光に満たされるという筋書きの氷上劇「光の子」も発表されたが、アフガンの闇は想像を絶するほど深い。ソルトレークで演出された「光」とは、米国主導のグローバル化のことはないかとさえ思えてくる。地球の半分以上の地域を覆う闇と貧困への想像力を欠いていると言わざるを得ない。」
- 24) 共同通信社 2002年2月9日 12:34. 素直な演出良かった—浅井慎平さん：写真家浅井慎平さんの話「開会式は想像したほど派手さがなく、良い緊張感が漂い、厳しい自然を舞台にした冬の五輪らしいナチュラルさが出ていた。昨年のテロ事件以降、時代の閉塞状況や複雑な国際事情もあったが、かといって米国は国威発揚の場という感じを強調しておらず、国際情勢に気を配っている感じだ。開幕のショーは、困難に立ち向かう少年の姿を描いていた。普遍的テーマであり、かつ今の時流にもかなっており印象的だった。日本の伝統を主張しようとした長野五輪の開会式よりも、その素直な演出に好感が持てた。」
- 25) 本誌掲載の拙稿 (2002年SLC Winter Olympic Gamesの開会式：WTC Flagの入場問題pp.67-71) 参照。